

日本英語学会第36回大会発表要旨

〈研究発表〉

第一室 (11月24日午後)

司会 木村宣美 (弘前大学)

「日本語の疑問文断片」

前田雅子 (九州工業大学)

本発表は、日本語の疑問文断片(Fragment Questions: FQs)の統語特性を明らかにする。

- (1) A: 飲み会では皆は何を飲んでいたの?
B: 阿部さんはビールを飲んでいたよ。
A: じゃあ、萱島君は? (FQ)

(永次 2017)

まず、残留要素は対照主題であり、削除部に疑問文が含まれることを示す。さらに、FQは言語的先行詞の意味を反映すること、残留要素は束縛原理の condition A/C に従うこと、島の制約に従うことなどから、FQは基底構造として節構造を有し、残留要素が削除部から移動していることを示す。これらの特性から、本発表では、FQは残留要素がCP領域の対照主題の位置に移動し、その補部がPF削除されると主張する。さらに、対照主題とwh句の複数の残留要素が生じるFQではその語順が固定されるという事実に基づき、日本語の左周縁部の階層構造を検討する。

[1] 永次健人(2017)「簡略疑問文断片のWH解釈について」福岡言語学会 2017年度第三回例会、福岡大学、2017年12月16日。

「ラベル付けアルゴリズムとカートグラフィアー」

戸塚 将 (旭川医科大学)

本発表の目的はChomsky (2013[1], 2015[2])のラベル付けアルゴリズムが話題化構文と焦点化構文という文の左方周縁部における現象にどのような形で適用出来るかを考察することである。これらの構文についてはRizzi (1997[3])等において、カートグラフィアーの枠組みで分析されてきた。しかし、近年の極小主義では、カートグラフィアーが想定する階層化された機能範疇の構造をそのままの形で扱

うことは理論上難しくなっている。そのためカートグラフィアーによる知見がラベル付けアルゴリズムによってどのように捉えられるかを検証することは両研究の統合を図るために重要である。具体的にはRizzi (2004[4])の素性のクラス分けに基き、焦点化構文はQ素性を持ちwh疑問文同様に素性共有によるラベル付けが行われ、話題化構文はラベル付けがされない{XP, YP}構造を持つと提案する。

[1] “Problems of Projection” [2] “Problems of Projection: Extensions” [3] “The Fine Structure of the Left Periphery” [4] “Locality and Left Periphery”

「XP-YP構造のスペルアウト:等位構造を中心に」

塩原佳世乃 (東京女子大学)

Chomsky (2013)は等位構造をXP-YP構造として分析するが、この背後には、 $SO = \{XP, YP\}$ はラベル付けされるために併合等によって修正する必要があるという前提がある。

この分析は未解決の問題を含む。まず理論的な問題として、ラベルはインターフェイスでの解釈のための前提条件とされているが、特に音声側のインターフェイスでSOがどのように「解釈」されるのか明らかでない。経験的事実としては、外的併合されるConjは、英語ではandあるいは韻律境界で実現されるが、Conjの音声的具現化の仕組みは明らかではない。

本論文は日英語の等位構造の例を見直して、その音声部門へのスペルアウト(書き出し)をスペルアウトする(明らかにする)を試みる。そしてXP-YP構造を修正してラベル付けすることは、音声側のインターフェイスでのXP-YPの卓立パターンの決定を可能にすることであると主張する。

第二室 (11月24日午後)

司会 秦 かおり (大阪大学)

“Analysing Critical Discourse Analysis”

Ian Wash (Rikkyo University)

As a methodological option for interdisciplinary researchers, Critical Discourse Analysis (CDA) and its associated approaches vie for position among other forms of discourse analysis and non-discursive methods. This presentation turns the analytical lens back on CDA and the academic context it competes in. Firstly, theories of discourse that help us to understand the ideas and beliefs of analysts supporting or challenging critical discourse approaches are examined. Next, a narrative form of critical discourse analysis will be outlined and applied to tell the story of processes and outcomes through which a diversity of actors discursively constructed the academic field. Extracts drawn from a corpus of documents representative of the epistemic community surrounding CDA will be used in the analysis to reveal the residues of agent-centred beliefs in relation to theories of discourse. Finally, an attempt at reconciliation is offered in conclusion.

「日・英語初対面会話における関係構築の対照分析—聞き手の役割」

岩田祐子 (国際基督教大学)

初対面会話の場で参加者がどのように関係を築こうとしているのかを、聞き手の役割すなわち聞き手からの働きかけに焦点を当てて考察する。日本語母語話者同士の日本語会話9組、オーストラリア英語母語話者同士の英語会話10組の計19組をデータとして用いた。東京とシドニーで収録した各30分の男性の三人会話である。英語会話では、自分の体験談を話すだけでなく、自分の信条、内面、考えに関わる話題を選び、聞き手も情報提供を促す質問やコメントを述べ、時には反論し、積極的に会話に働きかけ、三人で話題を進展させていた。一方、日本語会話においては、話し手が自分を語る自己開示も少なく、聞き手も聞き手に徹して情報要求の質問やコメントも少なかった。丁寧体で自己紹介が行われ、丁寧体は最後まで維持されていた。しかし途

中で自分の体験などの自己開示が行われるときに普通体に切り替えが行われ、心的距離を縮め関係構築を図っていた。

“Who’s a Beneficiary and Who’s a Benefactor?: Request Turn Design and the Sequence Organization at a Japanese Sushi Restaurant”

Satomi Kuroshima (Tamagawa University)

Drawing upon conversation analysis (CA) (Sacks (1992[1])), this paper explores how customers at a sushi restaurant design and form requests for food, by which they show a normative orientation to the contingency regarding the accomplishment of a requesting action (Curl and Drew (2008[2])). The paper describes various conversational practices that speakers employ in relation to the level of request contingency and the speakers’ claimed rights to make the request by orienting to overall configuration of participants. While the request turns are generally designed by which speakers’ entitlement as a beneficiary is displayed, different syntactic formats are selected in order to accomplish their practical task of placing an order. The paper will demonstrate how grammar is crucial in terms of the practical task orientation, and sensitive to the physical configurations participants normatively orient to.

[1] *Lectures on Conversation, Volumes I & II*. Blackwell. [2] “Contingency and Action: A Comparison of Two Forms of Requesting.” *Research on Language & Social Interaction* 41(2).

第三室 (11月24日午後)

司会 米山聖子 (大東文化大学)

“Comparison of Prosody of American and British English Using a Speech Corpus: A Preliminary Analysis”

Masahiko Komatsu (Kanagawa University)

This paper shows a preliminary analysis comparing prosody between American and British English using a speech corpus. These accents are known to have differences in the pronunciation of segments (vowels and consonants) and in word stress, but there has been little research into

differences in rhythm and intonation.

Part of the difficulty in prosody comparison arises from its variability: Any sentence can be spoken with multiple intonation patterns depending on the situation. This has motivated the use of *MULTEXT* [1], a multilingual speech corpus containing recordings of passages translated into several languages, including British English. An American English set of recordings of the content of *MULTEXT* is being developed by the author to enable comparison in the same context.

The analysis results show that some global acoustic parameters were not provably different, but some impressionistic differences were observed.

[1] Campione, Estelle, ed. (1998) *MULTEXT prosodic database* [CD-ROM]. Paris, France: European Language Resources Association.

「動詞句省略に対する音韻的分析」

齋藤章吾 (東北大学大学院)

本発表では、不定詞節における動詞句省略に対して、新たな音韻的分析を提案する。Zwicky (1982[1])、O'Flynn (2008[2])において、当現象は、不定詞標識が先行する要素と音韻句(Phonological Phrase)を形成するときに容認されると主張された。また、この音韻句形成は、節境界により妨げられると主張されたが、その際、不適切な構造が仮定されている。本発表は、動詞句省略環境下の音韻句形成は、Kenesei and Vogel (1995[3])が提案する、焦点に基づく韻律構造の再構造化により行われると提案する。また、先行研究に従い、再構造化は音調句(Intonational Phrase)境界により妨げられると提案する。この提案に基づくと、動詞句省略環境で極性焦点を伴う不定詞標識は、先行する音韻句に組み込まれるが、音調句境界が存在するとき、その再構造化は妨げられる。本発表は、適切な音韻句が得られるとき不定詞節における動詞句省略が容認されると主張し、省略の可否を説明する。

[1] “Stranded *to* and Phonological Phrasing in English” [2] “VP Ellipsis in Infinitival Clauses” [3] “Focus and Phonological Structure”

“A Comparative Study of Unaccusativity Alternation and Its Theoretical Implications”

Satoshi Oku (Hokkaido University)

Linyan Qiu (Jiangxi Agricultural University)

In English resultative construction, unergatives (1) require, but unaccusatives (2) cannot have, a fake reflexive. However, when the resultative phrase denotes a change of location, unergatives behave like unaccusatives (3): Unaccusativity Alternation (UA) [1]. Why is the adjunct phrase (not the head verb) responsible for argument structure change? [2] argues that it is the abstract head verb GO which induces the English UA (4), and that Japanese has an overt realization of this GO. In this paper, we claim that Japanese also has phonologically empty GO and that Chinese has both empty and overt GO. We will explore the implications of the analysis for phrase structure building of human language.

(1) John ran *(himself) exhausted.

(2) The lake froze (*itself) solid.

(3) John ran (*himself) clear out of the car.

(4) [unergative + GO] → unaccusative

[1] Levin, B. and T. Rappoport Havov (1995) *Unaccusativity*, MIT Press. [2] Yamada, Y. (1998) “Doosano yootaidoosini mirareru hitaikakuseino kootaini tuite,” *Northern Review* 26, 13-44.

第四室 (11月24日午後)

司会 村上まどか (実践女子大学)

「現代英語に見られる周辺の構文:SOV 構文の歴史的発達、統語的振る舞い、関連諸構文との関係、談話的機能を中心に」

滝沢直宏 (立命館大学)

現代英語の中には、ごく稀にしか出現しないものの無視できない数の実例が確認できる周辺の構文がある。滝沢 (2017) などで記述されてきた SOV 構文 (動詞が目的語 NP の後ろに現れる構文) もその一つである。英語の基本語順を破るこの構文は、相互に独立した複数の特徴が全て満たされた場合に、散文においても出現する。この構文は、Hirose (1991) などが論じる Just because S doesn't mean S. と意味的共通性をもつ。そして、Just because 構文においても、VO の語順を転換させた文の

存在が確認される。

本発表では、以下の諸点に焦点をあて、SOV 構文（を中心とする周遍的構文）に対して多角的な検討を加える。(1) SOV 構文の現代英語における容認可能性の揺れ、実際の使用状況、文体差。(2) 統語的操作の許容度。

(3) 談話的機能、修辭的効果。(4) SOV 構文の後期近代英語との関連。(5) 意味的共通性をもつ特異な構文の存否。

[1] Denison, David (1999) "Gradience and Linguistic Change," *Historical Linguistics 1999*, Benjamins. [2] 滝沢直宏. 2017. 『ことばの実際 2 コーパスと英文法』研究社。

「日本語属格主語文の通時的縮約と最小構造の原理」

小川芳樹（東北大学）

Harada (1971[1])は、日本語属格主語文の統語構造が通時的变化の途上にあると主張した。

本発表では、独自のコーパス調査の結果と、特定の構文内での主格主語文と属格主語文の容認性を異なる3世代に尋ねた独自の大規模質問調査の結果をもとに、[1]が約45年前に観察した言語変化が現在も進行中であると主張し、現存する世代間で異なる文法 A~D の存在を提案する。具体的には、文法 A の話者は CP 構造 (Hiraiwa (2002)) を、文法 B の話者は D-TP 構造 (Miyagawa (2011)) をもち、より若い世代の中でも、文法 C (D-vP 構造) から文法 D (D-VP/AP 構造) に向かっての縮約が進行中であることを、属格主語と場所副詞の共起可能性や、属格主語と非対格変化動詞・他動詞受動態との共起可能性から示す。また、このようなマイクロパラメータの値の変化は、言語獲得の際に利用可能な肯定証拠の質・量の変化と経済性の原理 (Bošković (1997[2])); cf. Westergaard (2014)) に起因すると論じる。

[1] "Ga-No Conversion and Idiolectal Variation in Japanese," *Gengo Kenkyu* 60, 25-38. [2] *Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, MIT Press.

「助動詞 ought の歴史的発達について」

森 敏郎（名古屋大学大学院）

現代英語における義務を表す助動詞 ought は to 不定詞節を従える。本発表では、当該の to 不定詞節は通常の to 不定詞節とは通時的発

達に差があることを示す。具体的には、ought が従える to 不定詞節における再構成(通常は節境界を越えて適用されない統語操作が、特に不定詞節を越えて適用されている現象)にあたる目的語移動は 14 世紀中に消失しており、通常の to 不定詞節における再構成の消失時期である 16 世紀(cf. 田中(2012[1])など)よりも早いことを電子コーパスから得られたデータより示す。そして、ought to を含む文における再構成の消失の原因は同時期までに完了した ought の助動詞化であると提案する。さらに、この提案に基づき、通常の to 不定詞節と ought が従える to 不定詞節における再構成の消失時期の違いが正しく説明されることを示す。

[1] 田中智之 (2012) 「再構成と非定形節における機能範疇の出現」『名古屋大学文学部研究論集』58, 69-88.

第五室 (11月24日午後)

司会 五十嵐海理 (龍谷大学)

「日英語の移動表現：経路概念の合成と空動詞」

並木翔太郎 (長野県立大学)

本発表は、日英語の移動表現における着点項の許容性について、(1) 日本語では経路動詞の場合に許容されるが、英語では移動様態動詞や運動動詞の場合にも許容され、(2) 移動様態動詞と運動動詞の間には、場所前置詞句の着点解釈の容認性に差がある、という2つの事実を考察対象とする。これらの事実に対し、本発表は加賀 (2007[1]) の空動詞分析を援用しつつ、経路概念の合成 (Namiki 2018) という観点から包括的な説明を試みる。まず空動詞パラメータの設定という加賀の提案に基づき (1) を捉える。次に、空動詞には主語にマクロな意味役割の「存在者」を付与する機能があると新たに定義する。「存在者」がマイクロな意味役割の移動主体として解釈されるには経路概念が必要だが、明示的に経路が表されない (2) では、既存の意味的構成素で経路を合成的に再解釈しなければならず、意味的構成素の有無が (2) を生じさせることになる。

[1] 「結果構文と類型論パラメータ」『結果構

文の新視点』, ひつじ書房.

「総称文の謎を認知能力の複合性から解く」

岩部浩三 (山口大学)

Leslie(2008[1])は, Sharks attack bathers のような少数の例にしか当てはまらない Striking Generic には, 人間にとって生死にかかわるような危険性を述べた例が多いことを指摘している。さらに, 幼児が早くから総称文を理解できるのに対して, 明示的数量詞は4歳以降に習得されることから「総称文は数量詞文と異なり, 生まれつきのデフォルト的認知能力と結びついている」と主張している。このことは, 上の例の無冠詞複数形には当てはまるが, 不定単数形や定単数形には当てはまらず, これらは大人の認知能力を前提にしているように思われる。本発表では, 「認知能力の複合性仮説」を提案し, 英語だけでなく日本語やフランス語においても, 複数の総称文形式が使い分けられていることを観察する。また, Striking Generic に伴う社会的偏見の問題 (例えば Muslims are terrorists) も, 不定単数形との使い分けによって克服できるはずである。

[1] “Generics: Cognition and Acquisition,” *Philosophical Review* 117-1.

“Proposal of a Hierarchy for Manner Salience Affecting Motion-Framing Choices in English: At What Point Did I Make This Weird?”

Ryan Spring (Tohoku University)

This study examines the effect that different manner types have on Talmy’s [1] typology of event conflation. Though many studies have noted that the type of path being conflated affects framing choices, not enough research has been conducted on how manner type affects them. This study surveyed 39 native English speakers to gauge their preference for certain types of manner to be conflated in the main verb by presenting them various sentences with two types of manner, one conflated in the main verb, and one outside. The results indicate that there is a clear preference hierarchy of non-volition > agentive > speed, deictic > path for preference of information to be conflated in the main verb. These results could help to explain discrepancies found in previous

experimental studies that have looked at speaker’s framing preferences.

[1] Talmy, L. (1991) “Path to Realization: A Typology of Event Conflation,” *BLS* 17.

第六室 (11月24日午後)

司会 柚原一郎 (首都大学東京)

「音放出を伴う Hit 動詞について—bang, bump, thump を中心に」

藤川勝也 (富山大学)

Levin (1993 [1]) は bang, bump, thump を Hit 動詞として分類し, これらの動詞は動能交替や With/Against 交替に参加するとしている。これらの動詞は「あるモノが音を発して何かと接触する」という点で共通しているが, 統語的には異なった振る舞いを示し, 単に放出される音の相違というだけでは説明できない。例えば bang は動能構文に生起する (I banged on the door) が, bump は生起できない。

本発表では, COCA から集めたデータを基に, 各動詞の意味的・統語的特性を明らかにし, bang, thump は Iwata (2008 [2]) の名詞派生動詞の分析を適用できるが, bump は異なる特徴づけが必要になることを示す。これは, 音と様態が連続性を成し (Iwata (ms.) [3]), bang, thump は音の側面を語彙化しているのに対し, bump は様態の側面を語彙化していることに起因する。

[1] *English Verb Classes and Alternations*. [2] *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. [3] “Putative resultatives II: Verbs of sound emission followed by a path PP”

「助動詞の XX 構文への関連性理論によるアプローチ」

時政須美子 (奈良女子大学大学院)

英語におけるある表現 X を繰り返す重複型表現 XX は, インフォーマルな話し言葉にみられる。筆者は, これを一定の形式と意味がセットになった XX 構文と呼び, その解釈プロセスの視点から, XX 構文が手続き的情報をもつと主張してきた。Ghomeshi et al. (2004:313[1]) は, (1) に基づき, この XX 構文の X には, 機能的項目である助動詞は生起できないと主張する。

(1) *Are you sick, or ARE-are you sick?

[Auxiliary]

本稿では、機能的項目である助動詞の XX 構文の存在を指摘する。そして Escandell-Vidal and Leonetti (2011[2]) が主張する手続き的情報の rigidity に基づいて、助動詞の手続き的情報による指示と、筆者の主張する XX 構文のもつ手続き的情報による指示との 2 つの指示が同時に達成されることで、助動詞の XX 構文の解釈が成立することを示す。

[1] “Contrastive Focus Reduplication in English”

[2] “On the Rigidity of Procedural Meaning”

「Rhetorical Imperatives の生起条件」

浅野真菜 (大阪大学大学院)

井原 駿 (大阪大学大学院)

いわゆる修辞疑問文 (Rhetorical Questions) に関する研究は数多く存在するものの (Sadock 1971, Sprouse 2007, 藤井 2015 など), 修辞的解釈が得られる命令文 (Rhetorical Imperatives, ‘RI’) に関する理論的研究は管見の限り殆ど存在していない。

本研究では、RI の意味論・語用論に関して、主に Kaufmann (2012,[2]) で提案されている命令文における前提 (presuppositions) を枠組みとして分析する。具体的には、RI は (a) Idiom タイプ、(b) Biased タイプ、(c) Complaint タイプ、(d) Irony タイプの 4 タイプに分類され、これらの解釈は、Kaufmann (2012,[2]) による命令文の前提にそれぞれどのように違反するかを信号として、会話の推意 (pragmatic inference, cf. Grice 1975[1], Horn 1984) によって得られることを提案する。

[1] Grice, H. P. (1975) *Logic and Conversation Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41–58. [2] Kaufmann, M. (2012) *Interpreting Imperatives*.

第七室 (11 月 25 日午前)

司会 中村太一 (福井大学)

「制限関係節における再構築と主語の移動に関して—POP+ と BEA の観点から—」

林 慎将 (九州大学大学院)

本発表では、Chomsky (2015 [1]) (POP+) と Chomsky (2004 [2]) (BEA) に基づき、1. 制限関係節 (RRC) の先行詞の再構築の非対称性

と 2. RRC と that-t(race) effect との主語抜き出しの非対称性を論じる。1 に関して、英語には that を用いた RRC と wh 演算子を用いた RRC があるが、先行詞の再構築が必要な場合、that RRC のみが適格となる。本発表では、wh 演算子の内部構造に着目し、再構築の非対称性に理論的な説明を提供する。また、2 に関して、POP+では、that の後ろから主語が移動すると文が不適格となる that-t effect に関し、ラベリング理論に基づいた説明を行った。しかし、that RRC では that の後ろからの主語の移動が可能であり、POP+の that-t effect の説明は that RRC には適用できない。本発表では、pair-Merge を導入した BEA に従うことで、ラベリング理論に基づき that-t effect と矛盾のない形で that RRC の派生を提供する。

[1] “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond*, 3-16, Benjamins. [2] “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond*, 104-131, Oxford.

「主語内部からの抜き出しとラベル理論」

菅野 悟 (東京理科大学)

本発表の目的は、主語の内部からの抜き出しに対し、ラベル(label)理論の観点から説明を与えることである。本発表では、Chomsky (2008[1])の不活性条件が C-I インターフェースで適用されると提案する。これにより ϕ 共有を起こしていない主語の内部からは抜き出しが可能であると予測される。この予測が適切であることを、まず、Chomsky (2008)の言語事実から示す。次に、Chomsky (2008)の反例となる、主語内部からの抜き出しが可能である事例を示す。そのような可能な種類は(i)ステージレベル述部の主語、(ii)節的動名詞 (clausal gerund)として生じる主語、(iii)不定詞節の主語、(iv)日本語のように頭在的な ϕ 素性を持たない言語の主語、(v)スペイン語のような屈折が豊か(rich)な言語における動詞後位 (post-verbal)の主語の 5 種である。これらの主語は ϕ 共有を起こしておらず、抜き出しが可能であり、本発表の提案により適切に説明されることを示す。

[1] “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166, MIT Press.

「Labeling Algorithm に対する経済性条件と抜き出し」

田中祐太 (名古屋大学大学院)

最近の極小主義の枠組みにおいて、移動(抜き出し)は併合操作に統合され、いかなる素性にも駆動されずに自由に適用されると仮定されている。したがって、EPP 素性等の駆動因としての素性に頼らずに、抜き出し現象に対して説明が与えられなければならない。

本発表では、Chomsky (2015[1])における Labeling Algorithm (LA)に修正を加え、LAに課せられる経済性条件を提案する。この条件は、一度 LA が適用された統語対象に再び LA が適用されること禁じるものである。その帰結として、連続するフェイズの配列は抜き出しにとっての島を形成するという一般化が導かれることを示す(Bošković (2015[2])). また、名詞句内からの抜き出しに関する事実も説明されることを示す。

[1] Chomsky, N. (2015) “Problems of Projection: Extensions.” [2] Bošković, Ž. (2015) “From the Complex NP Constraint to Everything: On Deep Extractions across Categories.”

「ラベル付けに基づく不定詞関係節の派生について」

松元洋介 (中京大学)

英語の不定詞関係節では前置詞に随伴される場合にのみ音形を持つ関係詞を持つことができる (e.g. an usher {from whom to buy tickets /*whom to buy tickets from}). 本発表では、格と前置詞を異なる種類の時制素性の具現形として分析した Pesetsky and Torrego (2004[1])に従い、ラベル付け (Chomsky (2013[2])) に基づく不定詞関係節の分析を提案する。具体的には、前置詞を随伴する不定詞関係節が文法的となり、関係詞が裸で現れる不定詞関係節が非文法的となるのは、時制素性の共有によるラベル付けの可否によるものであることを示す。さらに、同様に wh 句が現れる不定詞関係節である不定詞疑問節において疑問詞の生起に制限がないのは、前置詞随伴の有無にかかわらず Q 素性の共有によるラベル付けが成立するためであると主張する。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130. [2]

“Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories,” *The Syntax of Time*, ed. by J. Guéron and J. Lecarme, MIT Press.

第八室 (11月25日午前)

司会 窪田悠介 (筑波大学)

「二重目的語構文の統辞構造と間接目的語の取り出し」

田中章太 (関西外国語大学大学院)

二重目的語構文には様々な統語的・意味的特性が存在する。本発表では、そのうち(1)目的語間に存在する構造上の非対称性、(2)間接目的語の取り出し不可能性の説明を行うため、新たな提案を行う。現在の枠組みにおいて、ラベルは自動的に決定されるわけではない。そこで Rizzi (2016[1])で用いられている標示付けアルゴリズムと Epstein, Kitahara and Seely (2016[2])で提案されている外的対併合を採用する。また二重目的語構文の意味構造を考慮すると、間接目的語は小節の主語と考えられる。そこで Rizzi (2015[3])で用いられている機能範疇 Subj を小節構造に組み込むことで二重目的語構文の構造を捉える。

また Rizzi (2016[1])では、最大性の原則 (Maximality Principle)を提案し、移動の適応は最大の統語対象物に制限している。これを適応することで間接目的語の取り出し不可能性に説明を与える。

[1] “Labeling, maximality and the head-phrase distinction” [2] “Phase cancellation by external pair-merge of heads” [3] “Notes on labeling and subject positions”

「英語の否定辞繰り上げ: so 照応との相互作用の観点から」

坂本祐太 (中京大学)

本発表は、英語の否定辞繰り上げ構文と so 照応の相互作用を検討し、当該構文への意味論・語用論的分析を支持することを目的とする。否定辞繰り上げ構文とは NOT [Pred [S]] ⇒ Pred [NOT [S]] の推論が成立する構文である。Bill does not believe that Mary is here などが典型的な例であり、この文が持つ Bill believes that Mary is not here という推論的分析として、否定辞 not を埋め込み節に基底生成

した上で主節に移動する統語的分析 (Fillmore (1963 [1])など) と、当該構文の Pred が生み出す語用論的な排中律の前提を用いる意味論・語用論的分析 (Bartsch (1973 [2])) がある。本発表では、埋め込み節を照応する so 位置からの統語的移動が一様に禁じられることを記述した上で、NOT [believe [so]] の環境を検討し、当該の推論が得られることを示す。そして、この事実が so 照応位置からの否定辞移動を仮定する統語的分析には問題となるが、意味論・語用論的分析には問題とならないことを示し、後者の分析が妥当だと結論付ける。

[1] “The Position of Embedding Transformations in Grammar,” *Word* 19. [2] ““Negative Transportation” gibt es nicht,” *Linguistische Berichte* 27.

第九室 (11月25日午前)

司会 遠藤智子 (成蹊大学)

「事態把握様式における他者—認知文法から見た2つの間主観性—」

町田章 (広島大学)

事態把握様式は主観性の観点から二つに分類されてきた (cf. Langacker 1985[1])。例えば、町田(2016[2])は事態内視点と事態外視点に分けている。しかしながら、この分類には二つの疑問点が残される。一つは、事態外視点を生み出す自己分裂とは何かという問いで、もう一つは、本質的に間主観的な言語に話し手の主観だけを表す事態内視点は存在するのかという問いである。本研究では、事態内視点も間主観的であることを明らかにした上で、事態外視点と事態内視点に見られる間主観性は根本的に異なると提案する。前者の間主観性は他者の視点を話し手が想定することによって成立するが、後者の間主観性は話し手が他者の視点を自己に同化させることによって成立する。そしてこの間主観性の違いは、言語に二種類のグラウンディングシステムが共存していることを示唆している。

[1] “Observations and Speculations on Subjectivity” in John Haiman (ed.) [2] 「傍観者と参与者—認知主体の二つのあり方—」中村芳久・上原 聡 (編)

「直接目的語制約に従わない結果構文」

岩田彩志 (関西大学)

英語の結果構文において、結果句は直接目的語しか叙述の対象に出来ない、という制約があるとされている (Simpson (1983)[1])。しかし The 39-year-old Briton drove his Renault-Williams car to victory in the Portuguese Grand Prix.において、to victory は明らかに主語を叙述の対象にしている。本発表では、to victory を含む結果構文が、なぜ直接目的語制約に従わないかを考察する。

まずそもそもなぜ直接目的語が成立するのかは、causal chain 分析 (Croft (1990, 1991); Rappaport Hovav and Levin (2001)[2]) に基づいて説明できることを示す。実際に、直接目的語制約に従う結果構文の例では、force transmission により状態変化が起こっている。次に to victory を含む結果構文では、force transmission により状態変化が起こっておらず、直接目的語制約に従う必然性がない。結局、結果構文には、force transmission により状態変化を起こすものと、そうでないものとの2種類があることになる。

[1] “Resultatives” in M. Rappaport, et al (ed.) *Papers in Lexical-Functional Grammar*, IULC. [2] “An Event Structure Account of English Resultatives,” *Lg* 77.

司会 秦 かおり (大阪大学)

「to 不定詞の方向性の分析におけるコントロールサイクルの有効性について」

佐々木昌太郎 (高知工業高等専門学校)

to 不定詞の各用例には方向性が含意され、その方向性の意味は主節の意味によって異なるということが、先行研究 (Smith and Escobedo (2001[2]) など) から主張されている。しかし、主節の意味の何が要因となり、各方向性の意味が分類され、その分類内において類似する方向性の意味がもたらされているのかという点については明らかにされていない。本発表では、認知文法のコントロールサイクル (Langacker (2009[1])) という認知モデルを to 不定詞の分析に援用させ、これらの課題を明らかにする。具体的には、to 不定詞をとる主節がコントロールサイクルのどの段階にあるのかということから、方向性の意

味は大きく3つの段階に分類されることが動機づけられることを示し、また、各分類内において類似する方向性の意味をもたらす要因が説明されることを主張する。また、方向性の意味が希薄化した用例も、to不定詞の使用の動機づけが説明されることを主張する。

[1] *Investigations in Cognitive Grammar*. [2] “The Semantics of *To*- Infinitival vs. *-Ing* Verb Complement Constructions in English,” *CLS* 37.

「fromに後続する前置詞句の補語句用法について—BNCの調査を通じて—」

大谷直輝（東京外国語大学）

本発表では、前置詞句の補語となる前置詞句が持つ構造的・機能的特徴を論じるために、*British National Corpus* (World Edition)を用いて、[[前置詞₁][前置詞句₂]]の組み合わせの中で最も頻繁に生じる[[from][前置詞句₂]]を考察対象として、3つの定量的な調査を行った。具体的には、第一の調査では、[[from][前置詞句₂]]に現れる前置詞の頻度を、第二の調査では、[前置詞句₂]が表す意味の分類を、第三の調査では、[前置詞句₂]の機能的な分類を行うことで、[前置詞句₂]内に現れる前置詞と名詞句の傾向を定量的に示した。調査の結果、[前置詞句₂]の機能は、名詞句が表す領域を強調する「強調用法」(from within the company など)と、名詞句が表す領域に関連した領域を表す「参照点用法」(from beneath a tree など)に分類することが可能であり、両用法では[前置詞句₂]が表す領域の指示性の高さや、使用の動機づけが異なる点が確認された。

第十室 (11月25日午前)

司会 松岡幹就 (山梨大学)

「動詞の意味を詳述指定する小節構造」

安原正貴 (茨城大学)

英語には、動詞が下位範疇化しない目的語をとる現象が存在する。

(1) They drank the pub dry.

(Goldberg and Jackendoff (2004[1]: 536))

(1)のような例は結果構文と呼ばれ、目的語は結果句により認可される。(1)では目的語と結果句との間に叙述関係が結ばれ、小節を構成している。このタイプの小節は動詞が表す出

来事に対する結果事象を表す。

本発表では、(2)のような例を取り上げ、上記とは異なるタイプの小節が存在することを主張する。

(2) John hit the stone # (against the wall).

(Johnが石を壁に叩きつけた。)

この文は、括弧内に示された解釈を保持したまま前置詞句を省略することができない。また、目的語と前置詞句は叙述関係を結んでおり、小節を構成していると考えられる。(2)に含まれる小節は「石が壁に接触する」という出来事を表し、動詞が表す出来事(叩く行為)を詳しく指定する働きを持つ。本発表では、このタイプの小節が(2)以外にも様々な現象に観察されることを示す。

[1] Goldberg, A. and R. Jackendoff (2004) “The English resultative as a family of construction,” *Language* 80, 532–569.

「日本語の名詞修飾形容詞の意味と構造に関する再考察」

森田千草 (戸板女子短期大学)

日本語の形容詞は、多くの場合において、複数の名詞修飾形容詞間に語順の制約がなく、制限的解釈や交差的解釈が欠如していることから、間接修飾用法のみを持つと提案されている(Baker 2003[1])。本発表では、日本語の「い」形容詞と「な」形容詞の統語的・意味的特性を再考察する。

日本語の名詞修飾形容詞は語幹に形態素「い」または「な」のどちらかが付着して派生される場合が殆どだが、両方の形態素の付着を許す語幹がいくつか存在する(大きい大きな、暖かい暖かな、など)。同一の語幹から派生した「い」形容詞と「な」形容詞が統語的・意味的に異なる特性を示すことが観察されている(佐々木 (2002 [2])他)。この事実を踏まえ、本発表では「い」形容詞が常にTPを投射して(縮約)関係節を形成し名詞を間接的に修飾するのに対して、「な」形容詞はTPを投射せずPredPを投射し名詞を間接的に修飾する場合と、aPを投射し名詞を直接する場合があることを提案する。

[1] “‘Verbal Adjectives’ as Adjectives without Phi-features,” *Proceedings of 4th TCP*, 1-22. [2] 「大きい声」と「大きな声」, 『明海日本語』第7号, 137-145.

司会 都築雅子 (中京大学)

「We talked over coffee. タイプ文の意味的・統語的特徴について」

西原俊明 (長崎大学)

英語では、Quirk et al. (1985)が accompanying circumstances と呼ぶ over-句を含む文(以下、AC 文)が可能である。

We discussed it over a cup of coffee.

本発表は、overに後続するNPの意味的特徴、及び統語的特徴、AC文に生じる動詞の種類と意味的特徴を明らかにする。AC文のover-句は出来事を表現する短い時間枠を設定し、出来事はその時間枠内のいずれかの時点、もしくは枠内全体に及ぶことを明らかにする。また、over-句に続くNPは楽しみの対象を表す語句であることを示す。さらに、over-句は、様々な位置に pair merge される付加詞要素であることを示す。

[1] Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions, Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.

「because 構文の意味と解釈」

西山佑司 (慶應義塾大学名誉教授)

because 構文に(1)(2)(3)のような異なった用法があることはよく知られている。

(1) Mary fell because John pushed her.

(causal because)

(2) The neighbours are at home, because the lights are on. (inferential because)

(3) Hurry up, because we are late.

(speech-act because)

先行研究では(2)のinferential because節を、話者が主節の内容を信じる証拠/根拠を表す epistemic becauseとみなす立場が有力である。また関連性理論では、これを主節の高次表意に対するcauseであるとみなしている。本発表では、このような通説を批判し、because 構文の意味と解釈の問題を再検討する。とくに主節がspecificational sentencesの場合、causal becauseとは共起しにくい事実に注目し、(1)と(2)の区別は純粋に文意味論の問題であり、主節の表意や高次表意は無関係であることを論証する。

[1] Sweetser (1990) *From Etymology to*

Pragmatics. [2] Blakemore (1987) *Semantic Constraints on Relevance*. [3] Carston (2002) *Thoughts and Utterances*.

第十一室 (11月25日午前)

司会 島田雅晴 (筑波大学)

「wh 融合体の形態・統語構造について」

佐藤元樹 (福島大学)

wh 融合体と呼ばれる縮約された間接疑問文が句のように振る舞う現象は、これまで一般的に挿入句として分析されてきた。wh 融合体の挿入句的性質は、極小主義プログラムの枠組みでは、Guimarães (2004[1])と Kluck (2011[2])がそれぞれ多重支配構造や対併合から説明を試みている。

本発表では、wh 融合体を挿入句として併合する分析には経験的な問題があることを指摘し、wh 融合体は併合操作ではなく、主節とは独立した Spell-Out (Uriagereka 1999[3])によって派生された複雑な語であると提案する。本提案により、wh 融合体の分布特性、融合体に観察される一致現象、融合体の介在節における不透明性が説明されることを示す。また、本提案の帰結として、統語と形態のインターフェイスが Ackema and Neeleman (2004[4])が提案するように双方向の関係があることを論じる。

[1] *Derivation and Representation of Syntactic Amalgams*. [2] *Sentence Amalgamation*. [3] "Multiple Spell-Out" [4] *Beyond Morphology*.

「補部としての述詞関係節—亜種の属性分析と再解釈—」

渡辺良彦 (大東文化大学)

述詞関係節を含め、「補部」として機能する関係節の存在を最初に指摘したのは長原 (1990[3])である。本発表では、Grosu and Krifka (2007[2])の研究を手がかりとして、述詞関係節 (the way [my grandson is t]/ everything [a seasoned physician should be t]) の空所は「亜種の属性」(<e, t>)を表すことを論じる。ここでは、「亜種」の考え方として Chierchia (1998[1])の方針を前提とする。空所の亜種は先行詞名詞(種)の下位属性なので、関係節は先行詞名詞に対して、種の属性

の「部分集合」としての亜種の属性を定義する。複合 DP 全体の外延（この集合体がここでの亜種）はしばしば文脈内に表される。関係節自体は亜種の属性の集合 ($\langle\langle\phi, \rho, \rho\rangle\rangle$) なので、属性ではなく名詞句同様に「項」として機能する。このような状況で、先行詞-関係節が述語-項の関係に「再解釈」と考えられる（関係節は補部）。また、先行詞名詞が複数個体の場合は「亜種の属性分析」が当てはまらないことにも触れる。

[1] “Reference to kinds across languages” [2] “*The gifted mathematician that you claimed to be : Equational intensional ‘reconstruction’ relatives*” [3] 『関係節』

司会 木村宣美 (弘前大学)

「代名詞変項束縛における経済性」

堤 博一 (東北大学大学院)

演算子が代名詞をまたいで移動する * who_i does his_i mother love t_i のような文で代名詞の束縛変項解釈が許されないという交差制約に対して、生成文法において様々な説明がなされてきた。本発表では、大域的経済性にに基づく弱交差の分析を採用し (Ruys (1993[1])), その帰結を追究する。具体的には *even* や *only* 等の焦点化副詞を伴う who_i does *even* his_i mother love における弱交差効果の緩和や、*which* NP を用いる談話連結の疑問文およびかき混ぜ文における同効果の欠如 (誰_i をそいつ_i の母親が t_i 褒めたの)、並びに A 移動が弱交差効果を示さない事実 (who_i seems to his_i mother to be t_i smart) 等に対して説明を与える。極小主義初期以来、大域的経済性条件は計算負荷の大きな派生間比較を必要とする点で問題視されてきたが、自由併合の枠組み (Chomsky (2013[2]) 等) における同条件の位置づけも検討するつもりである。

[1] “A Global Economy Analysis of Weak Crossover” [2] “Problems of Projection”

「定冠詞の非特定の使用について」

北村 久 (北海道大学専門研究員)

定冠詞を持つ名詞句は非特定のであり得る ([1] Birner and Ward (1994) や [2] Birner (2013) などを参照)。本研究の目的は定冠詞を持つ目的語の非特定の使用のいくつかの言語環境を

指定することである。この種の名詞句は動詞の情報によってそれを特定しにくい程度に応じて非特定のであると要請する。それが動詞の情報によって特定しにくいのは、話し手が談話内でそれを処理するときにそれによって喚起される存在者を含む確立した談話指示対象の参照集合の中からそうした存在者を選び出すことが難しいときかつそのときに限る。この仮説は少なくとも三つの要因を持つ。第一の要因は動詞がそれに対して情報量が乏しいことである。第二の要因は動詞の行為がその存在者に大きな仕方で影響を与えないことである。第三の要因はある時制や副詞などが発話状況内で存在を確立したまたは確立するのを成り立たせないことである。

[1] “Uniqueness, Familiarity, and the Definite Article in English,” *BLS* 20, 93-102. [2] *Introduction to Pragmatics*, Wiley-Blackwell, Chichester.

第十二室 (11月25日午前)

司会 柚原一郎 (首都大学東京)

「素性の上方志向の継承と残余」

三輪健太 (茨城キリスト教大学)

素性継承は、主に時制辞 T が補文標識 C から素性を継承する統語操作として提案されているが、従来提案されてきた素性継承は、C から T、もしくは、 v^* から V への下方志向の素性継承に限られる (Chomsky 2008[1])。これに対し、Citko (2014[2]) は、素性継承の原理的可能性として、従来の下方志向の素性継承の他に、C から V、もしくは、 v^* から T への上方志向の素性継承の存在を指摘している。

また、継承された素性は継承元の主要部に残余しないと想定されているが、この他、継承された素性が継承元の主要部に残余する場合や、そもそも素性継承が起こらない分布の是非も検討する余地がある。

本発表では、「山田は旅先が京都が最適だと思っている / 山田は京都が旅先に最適だと思っている」の例にみられる第一主格名詞句に対する主格付与において、補文の C から主節の T への上方志向の素性継承が起こり、さらにその補文内では C から T への素性継承の後にも C に素性が残余することを主張する。

[1] “On Phases,” in Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria-Luisa Zubizarreta (ed.), MIT Press, Cambridge, MA. [2] *Phase Theory*, Cambridge University Press, Cambridge.

「ウェールズ語における一致の非対称」

小林亜希子 (島根大学)

検索子 P と目標子 G が一致するとき、表層的な階層関係が P>G である場合よりも G>P である場合のほうが形態的に豊かな一致となる。Kobayashi (2014 [1])はこの事実を「相対的一致」分析で説明した。本発表は、同じ分析でウェールズ語の一致を説明する。

ウェールズ語の一致は基本的に P>G である。G が代名詞ならば P は一致形をとるが、G が名詞句ならば不定形となる。これを次のとおり説明する。P は G 中の最上位の語彙項目(LI)にアクセスする (最小探査)。その LI が(a)完全な ϕ 値をもてば P の[u ϕ]が完全に与値され屈折形が決まるが、(b)部分的な値しかもたなければ屈折形が定まらず不定形で出力される。発表では、ウェールズ語の代名詞と名詞句がそれぞれ(a),(b)の構造をなす証拠を示す。

なお、G>P 関係での一致も少数の構文で起こるが、代名詞・名詞句ともに豊かな一致を引き起こす(Borsley et al. 2007 [2])。これも上の分析を用いて説明していきたい。

[1] “Relativized Agree,” *EL* 31. [2] *The Syntax of Welsh*, CUP.

司会 松岡幹就 (山梨大学)

「フェイズに基づくコントロール理論」

島 越郎 (東北大学)

本発表では、Chomsky (2000[1], 2001[2])で仮定されているフェイズ理論に基づいて、PRO と先行詞のコントロール関係を決める新たな解釈条件を提案する。非定形節が動詞の目的語や付加詞として生起する場合、不定詞節を直接支配する定形節の項が PRO の先行詞として解釈されるが (義務的コントロール)、非定形節が主語として生起する場合、同様の制限が見られない (非義務的コントロール)。Hornstein (1999[3], 2003[4]) は、この違いを移動に基づいて説明しているが、移動分析には問題があることを指摘する。代案として、

「PRO は、LF に転送される段階で同一の転送領域内に先行詞が存在する場合は、その変項として解釈されるが、それ以外では、自由変項として解釈される」という条件と「非定形節はフェイズを形成しない」という仮定に基づいて、義務的・非義務的コントロール関係を説明する。

[1] “Minimalist Inquiries: The Framework,” in *Step by Step*. [2] “Derivation by Phase,” in *Ken Hale*. [3] “Movement and Control,” *LI* 30. [4] “On Control,” in *Minimalist Syntax*.

「多重格付値と中間構文」

永盛貴一 (上智大学大学院)

本発表では、格は名詞句に多重に付値されることが可能であるというシステムを構築し、それに基づいて英語の中間構文に対する新たな分析を提案する。具体的には、Bruening(2001[1])とNarita(2007[2])に従い、一致は素性付値 (格付値) を行うのみで、素性削除 (不活性化) は転送によって行われると想定する。つまり、名詞句は素性付値が行われた後も、相の端への移動によって転送の適用を免れれば依然として活性であり、さらなる一致関係を結ぶことが可能であると考えることができる。中間構文においては、目的語がvとの一致により対格を付値された後、転送の適用前にそれが主語位置に移動してTとの一致により新たに主格を付値されると主張する。そして、英語においては、派生の最後に付値された格が実際に表出する。

[1] *Syntax at the Edge*, Doctoral dissertation, MIT. [2] “Spelling-Out Case-Values,” *Proceedings of the 21st Annual Meeting of the Sophia University Linguistic Society*, 23-49.

〈シンポジウム〉

A室 (11月24日午後)

“Language Contact and English Functional Items”

司会 Akiko Nagano (Tohoku University)

The general aim of this symposium is to arouse specialist interest in contact phenomena involving functional items and examine their implications for the relationship between Morphology and Lexicon. English has been influenced by contacts with other languages in its long history (Schreier & Hundt (2013[1])), while today it is affecting other languages due to its status as a global language (Crystal (2003[2])). Such a unique trait of the English language makes it possible to examine grammatical borrowing (Matras & Sakel (2007[3])) bi-directionally, that is, English functional items undergoing or causing contact-induced changes. We will present case studies that address (i) nominal morphology of older English as a recipient language, (ii) word-formation and (iii) verbal morphology of present-day English as a donor language. We will also analyze the findings from these and other studies in the framework of a lexeme-based morphological theory.

[1] *English as a Contact Language*. [2] *English as a Global Language*. [3] *Grammatical Borrowing in Cross-Linguistic Perspective*.

“Language-Internal and External Factors in the Growth of the s-Plural Formation in the History of English”

講師 Ryuichi Hotta (Keio University)

The present paper investigates the development of the nominal plural formation in *-s* in English, in an attempt to integrate language-internal and external factors behind language change. As the plural suffix was already available in OE, it has been commonly assumed that its remarkable growth from the Early Middle English period on was a result of its natural, or language-internally motivated, development. Examined closely from a

dialectological and a comparative point of view, however, it is more than likely that it was facilitated, and even accelerated, by language-external factors, especially intimate contact with Old Norse. The North Germanic language, with its nominal morphology partly comparable to that of English, arguably affected the distribution of the plural suffixes in English. Throughout the discussion, major emphasis is laid on the importance of taking account of the multiplicity of factors involved in language change.

“The Rise and Fall of Morpholexical Structures and the Influence from English”

講師 Jesús Fernández-Domínguez
(University of Granada)

Contemporary Spanish is a rather conservative language with regard to its involvement in language contact, and therefore almost immune to the incorporation of changes on its morpholexical or syntactic structures. A look at the literature will show that the impact of English on Spanish is essentially restricted to the lexical level and to a few latent examples of possible morphostructural change. Such is the case of lexemes created by using native material as input for a foreign word-formation process, e.g. *puenting* ‘bungee jumping’ (from *puente* ‘bridge’), and of allegedly unproductive native processes which seem to be reviving partly due to analogy with similar English structures, e.g. verb compounds like *bioestimular* ‘biostimulate’ (from *bioestimulación* ‘biostimulation’). This paper approaches the current situation of Anglicisation in European languages and, in particular, the influence of English on the word-formation and morphosyntax of Contemporary Spanish.

“How Is the English Volitional Modal *Let’s* Borrowed into Japanese?”

講師 Hiroko Wakamatsu
(University of Tsukuba)

In English, 1st person inclusive *let*-imperatives (e.g. *Let us go with her*) (Huddleston (2002[1])) can contract the object *us* onto *let*, yielding *let’s*, a one-word functional marker of proposal (e.g. *Let’s go with her*). Interestingly, this marker has been

borrowed into contemporary Japanese, where we come across such sentences as *Let's kukkingu* '(lit.) let's cooking' or *Let's kukkii* '(lit.) let's cookie.' In this presentation, showing the results of my corpus search of the borrowed *let's*, I consider the ways in which this marker has been borrowed into Japanese, and claim that borrowing in this case has proceeded in two stages. In the first stage, *let's* was borrowed via the process of Insertion (Muysken (2000[2])). But more recently, it has been reanalyzed as a complex expression containing a Japanese lexical verb, resulting in some deviation from the standard Insertion type.

[1] "Clause Type and Illocutionary Force," *The Cambridge Grammar of the English Language*, 851-945, Cambridge. [2] *Bilingual Speech: A Typology of Code-Mixing*, Cambridge.

"Three Distinctions in Grammatical Borrowing"

講師 Akiko Nagano (Tohoku University)

This talk introduces some key concepts related to grammatical borrowing and attempts to draw a coherent picture from the three talks of the symposium and other previous studies involving English functional items (Namiki (2003[1]), Nagano & Shimada (2018 [2])). I will focus on three recurrent distinctions. First, grammatical borrowing should be distinguished from lexical borrowing, as well as from L1 inferences. Second, free and bound grammatical morphemes seem to behave differently in contact situations. Third, Matter (i.e. form) and Pattern (i.e. function or category) of linguistic expressions should be distinguished in examining how they are copied from a donor language into a recipient language. Although language contact is largely neglected in theoretically oriented monolingual studies, I will argue that the three empirical distinctions, well known in contact linguistics, can be naturally understood within a lexeme-based morphological theory.

[1] "On the Expression *Rinse in Shampoo*" [2] "Affix-Borrowing and Structural Borrowing in Japanese Word-Formation," *SKASE Journal of*

Theoretical Linguistics 15.

B室 (11月24日午後)

「名詞句をめぐる拡張の諸相」

司会 前川貴史 (龍谷大学)

このシンポジウムの目的は、統語構造・語彙的意味・語形成・語法などの点において英語名詞句が拡張的に用いられる構造について、実証的に議論を深めることである。

金澤講師は、強調などのために名詞句を反復する構造の意味的特徴について、共起する動詞や形容詞の意味的分布を視野に入れながら考察する。藤講師は、付加的不変化詞 *as well* と名詞句との意味的なかわりを動的文法理論の立場から分析する。前川は、名詞と限定詞の統語的關係について、単数形可算名詞における限定詞の義務性と数の一致の観点から議論する。中澤講師は、統語的な形が無いにもかかわらず意味解釈にはかかわる要素について、構造・意味・派生のプロセス等を説明する。

本シンポジウムでは、英語の名詞あるいは名詞句のかかわる現象のうち、これまであまり注目が集まらなかったものについて各講師それぞれの立場から着目し、英語の多様な姿を解明することに貢献したい。

「英語における名詞句の反復に見られる意味的特徴について」

講師 金澤俊吾 (高知県立大学)

英語において、句を反復することで、程度の度合いの高さを表す場合がある。この句の反復は、動詞句や形容詞句に見られるが (Bolinger (1977[1]), Goldberg & Jackendoff (2004[2]) など)、名詞句にも見られる。反復される名詞句のパターンは、多岐にわたる。同一の名詞句が繰り返される場合 (*a long life, a long life*) や、2文にわたって名詞句の反復が見られる場合 (*The Old Man took a careful sip. A thoughtful sip. [COCA]*)、2番目の名詞句が、1番目の名詞句の意味内容を具体的に表す場合 (*a cup, a cup of cold water*) にそれぞれ用いられる。

本発表では、名詞句の反復は、実体の状態や、場面の状況をより特徴づける際に用いられる形式であり、1番目の名詞句と2番目の

名詞句との間で意味的分業がなされて形成されていることを主張する。また、同じメカニズムが、動詞、目的語名詞が同形である、同族目的語構文にも機能していることを示す。

[1] *Meaning and Form*, Longman. [2] “The English Resultative as a Family of Constructions,” *Language* 80.3, 532-568.

「動的な構文拡張の基盤としての名詞句：付加的不変化詞から等位接続詞へ」

講師 藤 正明 (東京海洋大学)

英語の付加的不変化詞 *as well* は、(1) のような談話において、焦点となる名詞句 (NP2) と結びつき、それを既出の名詞句 (NP1) に置き換えた(2) のような文を前提として、意味計算に導入する。

(1) Mary bought [NP1 flowers]. She bought [NP2 candies] *as well*.

(2) She bought flowers.

本発表では、習得途上の子供の *as well* が導入する意味要素が、次の段階で統語的にも実現されることにより、名詞句を等位接続する *as well as* が可能になるとする動的な文法理論による分析 (cf. 藤 (1986[1])) を取り上げ再検討するとともに、新たな証拠を提示する。特に、動的分析を採用すれば、様々な言語の等位接続詞の接続可能範疇に関して、名詞類と文を両極とする範疇階層上で定義される含意普遍 (cf. Haspelmath (2004[2])) が存在することや、*as well as* が等位接続できる統語範疇に *finiteness* を忌避する効果を持つ制約が存在することなどにも、自然な説明の道が開かれることを示したい。

[1] 「疑似等位接続詞について—*as well as* を中心に (1)』『英語教育』1986年5月号, 68-70. [2] (2004) “Coordinating Construction: An Overview,” *Coordinating Constructions*, 3-39.

「英語の限定詞と名詞の統語的關係：特殊と一般」

講師 前川貴史 (龍谷大学)

英語においては、単数形可算名詞と限定詞の統語的關係について次のような一般化が成り立つ。

(1) 英語の単数形可算名詞は限定詞を必要とし、その両者の間には数の一致がある。本発表では、この一般化の観点から限定詞と

名詞との統語的關係を考察する。特に注目したいのは (2) に挙げるような名詞句の統語構造である。

(2) *(these) size shoes / *(these) thousand students / *(these) sort of skills

これらの構造では限定詞が義務的であるが、これは下線部の単数形可算名詞 *size* / *thousand* / *sort* が限定詞を必要としているからであると言える。しかし (2) ではこれらの名詞は限定詞と数の一致を示しておらず、一般化 (1) に反する特殊な構造を持つと言える。本発表では、(2) のような名詞句の構造に対して *Head-driven Phrase Structure Grammar* (Pollard & Sag (1994 [1]) など) の枠組みによって一般化 (1) と矛盾しない自然な説明を与える。それと同時に、名詞句一般の統語構造に対してこれらの特殊な構造が示す理論的示唆について議論する。

[1] *Head-Driven Phrase Structure Grammar*, CSLI.

「潜伏名詞句の意味論と統語論をさぐる」

講師 中澤和夫 (青山学院大学)

本発表は、ある特異な名詞句について考える。その名詞句は、統語的な形は無いにもかかわらず、意味はあるという奇妙な特徴を持つ。例えば、(1) の下線部である。

(1) The closest we can come to that is the subject-predicate construction of English.

(1) の主語は、(a) 意味的には、「ある到達点」という、「場所」の意味の名詞句である。しかし、(b) 統語的には、*we can come the closest to that* は良いが、**we can come the closest point/place to that* が不可であることからわかるように、この主語の「統語的」主要部は *the closest* という形容詞句であって、*the closest point/place* という名詞句ではない。この事実はつとに知られてはいたが (Cf. 中澤 (2006a[1], 2006b[2])), 何故このようなことが可能になるのかは不明であった。本発表では、この「名詞句」(潜伏名詞句と呼ぶ) の意味、構造、派生の特徴等を考察する。

[1] 「最上級に導かれる関係節」『英語語法文法研究』13, 111-126. [2] “The Genesis of English Head-Internal Relative Clauses: A Dynamic View,” *EL* 23. 2, 380-402.

C室 (11月24日午後)

「異文化理解と多文化共生—マイクロ・マクロアプローチからみる『ことば』の諸問題」

司会 秦 かおり (大阪大学)

本研究は、人口減少、高齢化、グローバル化といった現象により移民・移住などの人的流動が引き起こしうる諸問題をマイクロ・マクロアプローチから炙り出し、異文化理解と多文化共生につなげることを目指すものである。その中でも特に、本シンポジウムでは言語使用や言語政策に焦点を絞り、異言語が存在する家庭の子供へのfamily language policyの問題、教育現場や職場における異文化摩擦と共生の取り組みの実情、また政府の言語政策とその効果等について、各講師が報告を行う。マイクロアプローチとしてのナラティブインタビューや自然談話のインタラクション分析からマクロアプローチとしての政策研究まで、また日本国内の移民・移住者から、比較としての日本国外の移民・移住者までを対象に、複合的に分析することで、今後の日本社会のあるべき姿の一つを提言する。

「異文化理解と多文化共生—在英邦人女性調査からの提案—」

講師 秦 かおり (大阪大学)

本発表は、Brexitの賛否を問う国民投票後に行われた在英邦人移民に対するインタビュー調査を通じて、国民投票結果という形で顕在化した移民への国民感情が移民の社会的立ち位置にいかに関与したかを分析する。そして、義理の親戚ですら移民排斥に傾いている状態で、彼女らは英国社会や人々とどのような「多文化共生」を結び直そうとしたかについて検討する。

発表では、在英邦人女性約30名に国民投票直後の2016年とその翌年に継続調査を行い、そのナラティブのマイクロレベルからの分析結果を報告する。調査では、地域社会との交流、家庭内言語政策と公教育のサポート等、かつては移民として満足を示していた人々が国民投票をきっかけに差別に直面したり、将来の教育への不安を表明していた。

英国は移民先進事例だが、現状では好例とは言い難い。発表では、それを参考例として日本に活かす重要性を論じる。

「異文化理解と多文化共生—日本在住カナダ人の視点からの提案—」

講師 山口征孝 (神戸市外国語大学)

日本人にとっての「国際化」は、国内において各地に散在する外国人コミュニティの存在により実感できるだろう。しかし、このような移民コミュニティの現実を日本人はどの程度理解しているだろうか。本発表では、カナダから教育者として来日し30年以上教育に専心しているカナダ人女性へのインタビューから、日本の国際化に貢献し得る実践例を紹介する。具体的には、NPO/NGOと言う形でのサービ斯拉ーニングを日本人大学生が神戸で実践した例を通し、多文化共生を考察する。

このような問題意識から、本発表の焦点は、サービ斯拉ーニングを外国人コミュニティで実践することの意義を考えることである。特に、多文化主義的視点を日本人の若者の教育に取り入れることで、移民に対して「何かをする(してやる)」という立場ではなく、「移民から学ぶ(学ばせてもらう)」という発想の転換が異文化理解と多文化共生に貢献し得る可能性を論じる。

「異文化理解と多文化共生—職場談話研究からの提案—」

講師 村田和代 (龍谷大学)

日本企業の国際化は、もはや海外展開だけに限らず、国内においても外国出身者の雇用により急激に進んでいる。しかし、現実はどうなのか。本発表では、実際の職場談話の分析や、国内で働く外国人・海外で働く日本人へのインタビューを通して、職場談話の特徴や企業の国際化を阻むコミュニケーション上の課題について考える。

さらに、職場談話研究プロジェクトとして大規模展開しているLanguage in the Workplace Project (ビクトリア大学、ニュージーランド)を紹介する。LWPでは、研究成果の学術的発信は言うまでもなく、社会貢献にも積極的に取り組み、海外からの移住者向けの多様な教育プログラムを開発してきた。発表では、先進事例の考察をベースに、談話研究が異文化理解と多文化共生にどのように貢献できるかや、国内においてどのような研究の可能性があるかについても論じる。

“Intercultural Understanding and Multiculturalism: Suggestions from International Education”

講師 Julian Chapple (Ryukoku University)

In order to ensure the successful societal integration of migrants, education policies (in particular language related ones) need to be reformed and modified to accommodate the needs of everyone - both migrant and native. Japan is now at a crossroads and will gradually need to face up to this reality.

This presentation will introduce the potential benefits that could be gained by the education system from greater openness to diversity and collaboration with international education. In particular it looks at what opportunities are being missed and how reforms could benefit language learning. Further, using examples from New Zealand’s education system, as well as the results of interviews with Japanese migrants living there, it illustrates the importance of family and home language policies and the value of schools being involved.

D室 (11月25日午後)

「ツリーバンク開発と言語理論」

司会 吉本 啓 (東北大学)

講師 プラシャント・パルデシ

(国立国語研究所) [趣旨説明]

日本語に関して従来公開されてきたコーパスは、文の文節への分析を基礎として、形態素解析情報および文節間の係り受け関係をタグ付けしたものが中心である。しかし、言語研究に必要となる階層的な深い情報を文節とその係り受け関係から自動的に得ることには限界がある。現在、国立国語研究所で文の統語解析情報 (句構造) をアノテートした NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ)の開発が進められている。本コーパスはペン通時コーパス (Penn Historical Treebank; Santorini 2010[1]) のアノテーション方式を採用しており、統語情報のアノテーションは表層的、中立的なものであり、特定の形式言語理論にコミットしていない。本シンポジウムでは NPCMJ の開発、このコーパスを検索するための検索ツールおよびコーパス

に基づく言語研究の可能性について最新の研究成果を報告する。

[1] Santorini, B. (2010) Annotation Manual for the Penn Historical Corpora and the PCEEC (Release 2). Tech. rep., Dep. of Computer and Information Science, University of Pennsylvania.

「言語研究と統語・意味解析情報付きコーパス」

講師 吉本 啓 (東北大学)

従来日本語について入手可能なコーパスは、形態素情報を基本として、文節と文節間の係り受け情報を付加したものに限定されていた。しかし、形態素情報だけでは文法的な曖昧性を克服するには不十分である。また文の文節への分割は意味を反映しない。これに対して、文統語・意味解析情報付加コーパス NPCMJ は句構造解析情報がタグ付けされており、構文にもとづくピンポイントの言語データの解析を可能にする。また、句構造とその自動意味解析により語句間の依存関係が正確に把握され、様々な文法情報の提供が可能になる。

本発表では、NPCMJ 開発の動機に続き、アノテーションの方法について説明する。さらに検索利用による日本語使用実態の解明について具体例を挙げ、NPCMJ により日本語の量的研究と質的研究の統合がもたらされることを述べる。

「構文検索ツール NPCMJ Explorer」

講師 鈴木彩香 (国立国語研究所)

講師 窪田悠介 (筑波大学)

講師 プラシャント・パルデシ

(国立国語研究所)

本発表は、NPCMJ の検索インターフェース開発の中で見えてきた、統語・意味解析コーパスと記述文法研究の接点について報告、および提案するものである。日本語の主要な文法現象を検索することを目的とした NPCMJ Explorer の開発にあたって、代表的な記述文法書である益岡・田窪 (1992[1])の記述と NPCMJ のアノテーションを照らし合わせる作業を行ったことにより、NPCMJ を用いて文法項目を検索する際に強みとなる部分が明らかになった。本発表では、その点について課題となる点も含めて報告するとともに、両者の接点からもたらされる新たな研究の可

能性をさぐる。

[1]益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法-改訂版-』くろしお出版

“A Unified Interface for Exploring English and Japanese”

講師 Alastair Butler (弘前大学)

This talk gives a general introduction to the data model and online interfaces available for accessing two parsed corpora that have been developed largely in tandem: the NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ) (also available in an earlier release form as the Keyaki Treebank) and the Treebank Semantics Parsed Corpus (TSPC). While these corpora are for very different languages, Japanese and English, respectively, there is considerable overlap, both in terms of parallel data, as well as principles of annotation. In addition to full availability of the source annotation, results can be accessed through a shared web-interface that allows for sophisticated searches of syntactic structure using a flexible path based query language, and flipping between results for either resource, as well as visualisations, including views to explore syntactic dependencies across tree structures in discourse, track multiple modifier-head dependencies, follow cross-sections of valence information for verbs, nouns, and adjectives, and observe resulting displays from semantic calculations.

“English/Japanese Contrastive Study Based on Normalization, a Step in the Semantic Processing”

講師 Stephen Horn (国立国語研究所)

講師 Alastair Butler (弘前大学)

In a Scope Control Theory (Butler 2015[1]) driven corpus, annotation directly encodes local dependencies like head::complement, predicate::argument, clause::subject. Other dependencies like pronoun::antecedent, extraction site::extracted element, controller::null subject, etc. can be indirectly established by reading generalized structural definitions into a semantic calculation. Whether for Japanese or for English, if the annotation is sufficiently principled, it can be normalized (re-written) into input for the

calculation. Put into practice in the NPCMJ and TSPC, the relationship between the annotation and the normalization, and the language-specific aspects of the normalization program itself, both encapsulate contrasts between Japanese and English. In this paper we compare annotation of “Peter Rabbit” in the original English with that for a Japanese translation to exemplify some of these contrasts, ranging from morphology (e.g., encoding the grammatical category of number) to semantics (scope of negation, indefiniteness, etc.).

[1] Butler, Alastair. (2015) *Linguistic Expressions and Semantic Processing: A Practical Approach*, Springer.

E室 (11月25日午後)

「言語理論における形態論の「分散」をめぐる諸問題」

司会 大関洋平 (早稲田大学)

形態論は、統語計算にみられる規則性だけでなく、意味・音韻解釈で観察される語彙的な不規則性も併せ持ち、言語理論において体系的な把握が難しい研究対象であり続けてきた。この問題を解決するため 1993 年に提案された形態理論が「分散形態論」(Distributed Morphology)である。分散形態論は、伝統的にレキシコンへ詰め込まれていた統語・意味・音韻情報を、文法アーキテクチャの様々な部門に「分散」させることで、形態論へ体系的にアプローチする枠組みを提供してきた。しかしながら、その誕生から 25 年が経過した現在も、形態論の「分散」をめぐる多くの諸問題には決着が付いていない。本シンポジウムでは、これらの諸問題を共有している各講師が話題を提供し、シンポジウムの参加者を巻き込みながら議論を行う過程で、言語理論における形態論の位置付けと諸問題を検討する。

「分散形態論の概要」

講師 大関洋平 (早稲田大学)

本発表では、「分散形態論」(Distributed Morphology)の概要を説明する。まず、分散形態論の中心的な作業仮説である「単一動力仮説」(single engine hypothesis)と「後期挿入仮説」(late insertion hypothesis)を確認した後で、分散形態論が仮定する文法アーキテクチャを示し、

形態素 vs. 語彙項目、語根 vs. 機能範疇、語彙主義 vs. 反語彙主義などの基礎概念、そして統語・意味・音韻素性の分散を整理する。次に、形態論の「分散」を仮定する他の形態理論との比較を通して、近年の分散形態論において論点になっている諸問題とその経験的な証拠を議論する。最後に、心理言語学的な観点から言語処理のモデルとしての分散形態論の可能性を示唆した後で、各講師の提案を分散形態論の文法アーキテクチャに位置付け、発表のバトンを渡す。

「複合語を伴う *wh* 疑問文と短縮応答について」

講師 成田広樹 (東海大学)

講師 木村博子 (目白大学)

日本語では、*wh* 要素が複合語の一部を成す疑問文「彼は何殺しの犯人を捕まえたの？」が可能であり、対する答えとして文応答「彼は猫殺しの犯人を捕まえた (のです)。」や短縮応答「猫です。」が可能である。連濁やアクセント移動から、これらの疑問文や文応答で複合語形成が行われているのは明らかである。本発表では、上のような短縮応答は、「[彼は[猫]殺しの犯人を捕まえたの]です。」のように、焦点要素を省略領域内に含む削除(焦点内包型削除)が文応答の構造に適用されることで派生されると提案する。本発表ではさらに、このような短縮応答では、複合語構造を元に派生されながらも、複合語特有のアクセント消失が見られないという事実に着目する。そしてこの問題に対して、分散形態論の枠組みを採用し、語彙アクセントは、音韻素性ととともに統語計算後の音韻部門で挿入されると提案する。

「ゼロ形態とその削減について」

講師 田川拓海 (筑波大学)

統語・意味・音韻の関係を探求する上で、ゼロの要素の扱いは重要なテーマの一つである。形態理論としての分散形態論は分析の際に多くのゼロ形態を仮定しなければならないという特徴を持っている。本発表では、分散形態論で仮定される「ゼロ形態」(zero exponence)には、(1)他の形態との「競合」(competition)の際に優先されるもの、(2)デフォルトの形態あるいは非該当形、(3)上記のいずれにも当て

はまらず特定の形態統語環境で現れるもの、の3つのタイプがあることを示し、(1)以外はゼロ形態を仮定しない分析が可能であることを示す。具体的には、(2)に対してはそもそも語彙項目あるいは形態規則を設けなくても良いこと、(3)に対しては形態操作の一つである「節点削除」(obliteration)の採用を提案し、日英語の諸現象の分析に有用だけでなく形態操作の体系化にも寄与することを明らかにする。

「動詞由来複合名詞と複合形容詞について」

講師 西山國雄 (茨城大学)

「立ち読み (する)」、「本読み (*する)」、「黒こげ (だ/の)」のような動詞由来複合名詞と「欲深い」や「経験豊富な」のような複合形容詞はこれまで語彙的に分析されてきたが、本発表ではそれらの統語・意味・音韻を、分散形態論の枠で統語的に分析する。動詞由来複合名詞では、軽動詞との共起と、事象か状態かの意味の予測が問題となる。軽動詞の出現は、*v*の語彙挿入規則で非該当規則が適用された結果と分析し、意味については、イベントの意味は統語構造に基づき合成的に得られると仮定する。「窓拭き」と「から拭き」の連濁とアクセントの差異については、語根の範疇化の差異(前者は動詞で後者は無範疇)に還元されると分析する。複合形容詞については、形容詞と形容動詞でアクセントの違いはあるが、統語構造と派生は同一であり、「ヨーロッパ旅行 (中)」のような統語後複合語と同様に統語的に派生すると分析する。